氏　　名	金井　勇人
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博文化乙第７号
学位授与年月日	平成２４年３月２２日
学位授与の要件	学位規則第３条第４号該当
学位論文題目	人称指示における使用原理から見た現代日本語の指示語についての考察
論文審査委員	委員長　教　授　仁科　弘之
	委員　教　授　小出　慶一
	委員　教　授　武井　和人
	委員　教　授　川野　靖子
	委員　准教授　石黒　　圭（一橋大学留学生センター）

論 文 の 内 容 の 要 旨

金井氏（以下、著者）のこの論文（以下、本論文）は、日本語の指示詞（著者の用語では指示語）について、指示詞研究の中での最大の問題である、1）文脈指示と現場指示を統一的に説明すること、2）現場指示における中距離用法のソと聞き手用法のソを統一的に説明することの2つの問題について、その解明を目指したものである。指示詞についての研究は、すでに70年以上の研究史を持つものであるが、この2つの問題についてはいまだに未解明のままになっているものである。本論文は、これらの問題について発表して来た論文９点（内査読論文３点）をもとに、書き下ろし論考を加え、体系的に論述し直したものであり、上の2つの問題なかでもとくに後者の問題の解明に力が注がれている。

第 1 部では、指示詞の研究史が述べられ、本論文の課題の位置づけがなされている。ここでの説明によれば、中距離のソというのは、話し手と聞き手が横並びの状態で指示対象を見たときの、遠くも近くもないものとされる。また、聞き手領域のソとは、話し手と聞き手が相対しているときに、聞き手領域にある対象を指示するソである。このような 2 つのソを統一的に捉えるための議論が第 2 部で展開される。

この問題に対して、本論文は次のような手続きで解明を目指している。まず、いわゆる現場指示について、対立型と融合型という 2 つのタイプが認められるが、この 2 つの型の区分が中和される用法（本論文では「中間型」と呼ばれている）を抽出することによって、それをプロトタイプとし、そこからの派生として 2 つのソを考えようとするのである。また、その際に注目されるのは、ソ系指示詞で指示される会話参加者である。

ここで言われる中間型については本論文8章､9章で述べられている｡その説明によれば、聞き手として認定されていない人を指す時に「そこの N」（例えば「そこのお坊さん」）という表現が用いられるが、これは相手を対立するものと見ているので対立型であるが、しかし近距離にいる相手に使えないので距離型（融合型）でもありうるという 2 面的な性格を持ったものであるとされている。この 2 面的な性格が中間型と言われる所以であり、この

ような中距離用法のソと聞き手用法のソが未分化な用法を見出すことによって、ソ系指示詞の統一的な把握が可能であると論じられている。
また、このソの中間型を仮定することにより得られた［近称］［話し手占有領域］という2つの素性を使うことで、これまで人称区分、距離区分という2つの異なる原理で捉えられてきた指示詞の体系は統一的に捉えられることになり、２系列の指示詞体系を持つ英語などの言語と並行的に、原始的には［＋近称］（コ）と［－近称］（ソ・ア）とに区分されるとされている。

補説 2 では、他言語との比較が行われているが、3 系列の指示詞を持つ韓国語にも、中称の指示詞には中距離用法が、その指示範囲は日本語に比して狭いが存在することが指摘されている。

以上のように、本論文では、主としてソ系指示詞、とくに人を指す用法を中心に考察を進め、中間型と呼ぶべき用法を見出すことによって、中距離用法のソと聞き手用法のソを統一的に捉え、またそこから得られた 2 つの素性を用いて、3 系列の指示詞を 2 系列的に捉えなおす可能性が示され、他言語との比較が可能になる視点を提案するに至っている。

【目次】

第Ⅰ部　指示語の全般について
第 1 章　はじめに
　１．「指示語」の概観
　２．「指示語」に関する議論の焦点
　３．本稿の目的および構成
第 2 章　先行研究の概観
　１．佐久間鼎（1936、1951）
　２．三上章（1953、1970）
　３．坂田雪子（1971）
　４．堀口和吉（1978）
　５．正保勇（1981）
　６．金水敏（1999）
　７．先行研究からの流れにおける本稿の位置づけ
第 3 章　文脈指示語に現れる現場指示語の特性
　１．はじめに
　２．考察対象としての「－いつ」系の指示語
　３．「－いつ」系の指示語の位置づけと考察の対象
　４．他称の用法
　５．自称の用法
　６．まとめ

第Ⅱ部　現場指示におけるソ系の指示語について
第 4 章　非丁寧さという観点から見た二人称指示の体系

１．はじめに
２．二人称指示の 5 つのタイプ
３．非丁寧さという観点から見た二人称指示の体系
４．「親愛の情」と「慇懃無礼」
５．politeness 理論との整合性
６．まとめ
第 5 章　「そちら」の 2 つの機能について
１．はじめに
２．「あなた」と「そちら」の相違点
３．「そちら」の 2 つの機能
４．「そちら」が使用できない場合
５．まとめ
第 6 章　「こちら」の 2 つの機能について
１．はじめに
２．「コ対ソ」を前提として使われる「こちら」
３．「聞き手不特定発話」における話し手を指す「こちら」
４．「聞き手特定発話」における話し手を指す「こちら」
５．「こちら」が使用できない場合
６．まとめ
第 7 章　「そちら」「そっち」の相違点について
１．はじめに
２．「そちら」で聞き手を指す動機
３．聞き手指示と第三者指示
４．聞き手指示
５．第三者指示
６．まとめ
第 8 章　聞き手を指す「そちら」と「そこ」について
１．はじめに
２．「そこ」が聞き手を指すプロセス
３．「そこ」が聞き手を指せる場面
４．具体的な事例を通して
５．まとめ
第 9 章　聞き手を指す「そこの N」について
１．はじめに
２．「そこの N」で聞き手を指す動機
３．聞き手を指す「そこの N」が成立する場面
４．「そこの N」の非丁寧さ
５．まとめ
第 10 章　おわりに

１．本稿の構成と目的

２．本稿で得られた成果（指示語体系コソアの再考）

補説１　ド系の「指示語」について：不定語（句）「誰」「誰か」「誰も」について

補説２　日本語と多言語の指示語の対照

日本語と諸言語の指示語の対照について：インドネシア語・韓国語・中国語

１．はじめに

２．日本語

３．インドネシア語

４．韓国語

５．中国語

６．おわりに

論文審査の結果の要旨

学位論文審査委員会は、当該論文の発表会を 2012 年 2 月 22 日（水）に公開で開催し、著者による発表を踏まえ、質疑を行い、論文内容を審査した。

本論文における特徴的な研究上の方法、結論付けられた新たな知見・見解、また研究現況に与えるであろうインパクトなどを挙げる。

1）ソ系指示詞の 2 つの用法（中距離用法、聞き手用法）の統一的把握という課題は、佐久間鼎（1936）を嚆矢とする指示詞研究の中でいまだに解決案のない難問中の難問である。本論文の功績をあげるとすれば、まず、この問題に対して、ひとつの答えを提案している点であろう。さらに、それが、地道な用例の検討の積み重ねから得られている点で、その提案は大きな説得力を持つに至っている。指示詞研究のスタートラインを引き上げ、新たに引き直すだけのインパクトのある考察、結論が得られていると考えられる。

2）本論文での議論が、事例についての鋭い分析に基づいており、各章において、指示詞の、とくに人称用法に関して新たな指摘が多く示されている。たとえば、3 章では「こいつ」「あいつ」に自称詞用法があること、5 章では、「そちら」が自他の対立を持つという点で「あなた」と異なるなどの指摘である。本論文の全体としての課題は、「概要」に述べたとおりであるが、ソ系指示詞に関する全体的な観察が、課題についての考察を支えると同時に、豊かな副産物を得ていることになる。この点でも、人称用法の指示詞の研究レベルを高めるものとなっている。

3）日本語の指示詞は 3 系列の体系をなすが、2 系列の言語との異なりは、ソ系指示詞の機能をどう捉えるかという点にある。本論文は、［±近称］［±話し手の占有領域］という観点を導入することで、統一的に捉えられる可能性を示したことも、これからの他言語との比較対照研究にひとつの見方を提案することになっていると思われる。また、実際に他言語との比較を行われ、その有効性も確かめられている。

本論文の研究姿勢、およびもたらされた結論は、上述の如く高く評価されるべきものであるが、しかし、なお検討されるべき問題、論証の徹底、等が存することも事実である。発表会で委員から出た意見等を集約すると、以下のようになる。

1）本論文では、ソ系指示詞の 2 用法が統一的に説明できるとされているが、次のような問題点も指摘された。ひとつは、中距離用法の捉え方が妥当かという点である。中距離用法は、融合型にしか現れないとされていたが、対立型にも現れるという観察もある。もし対立型の中間用法を認めると、本論文の全体的な骨格が変わる可能性がある。

2）中間型という型を上位スキーマとしているが、ソ系 2 用法のどちらの性質も持たない可能性もある。もしそうであるならば、中間型という設定そのものが崩れることになる。

また、中間型認定の根拠となっている、「そこのＮ」という表現が、相手認定のない状況での聞き手指示という捉え方であるが、これを人を指す用法と見るのが妥当かについても疑問が呈された。「そちら」ならば相手にむかって言うことはできるが、「そこ」で相手を指すことはできないからである。

3)　提案された２素性を意味論的素性と語用論的素性として区別することで、対立型をも説明対象に含めることができる可能性がある。さらに、２番目の素性である[話し手占有領域]を話し手がもつ視点範囲と解釈し、10 章で提案された「相手」という概念を、無存在と聞き手（さらには話し手）を値に取るパラメータとして設定してみよう。すると、そのような相手が話し手の占有領域内にある（+)、領域内にない（-) と考えることで、２用法の「ソ」も含めた「コ」「ソ」「ア」の使用を説明する、動的な指示物認知モデルに基づいた意味・語用理論構築への期待が高まってくる。

本論文には、これらの問題点はあることも事実であるが、総体として見れば、今後、当該研究領域において、大きなインパクトを与える業績として認知されるであろうことが予想される。

以上のことから、本委員会は、本論文が学位論文の要件を満たしており、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。